

利己的本能の再考

望月 文明

目次

1. 問題
2. モラロジーにおける「利己的本能」の特徴
3. 道徳的直観と合理化：自己の道徳推論の影響力に対する過信
4. 自己奉仕バイアス：無自覚な利己的偏向の自己評価
5. 本源的自己中心性：共感と客観性の限界
6. 考察：なぜ悪いことを悪いと思う心は悪いのか——「自分は正しい」という認識や感覚の再考
7. おわりに：「普通道徳は正しい」を再考するアプローチの可能性について

「人間がおこる間はまだ駄目で、まだ動物だ。どんなことがあっても
おこらんようになったら、人間の仲間入りができたのだ」

中田 中『最高道徳の帰着点』より

1. 問題

近年、道徳的直観の研究の動向に注目するようになるまで、著者は、推論以外の要因が道徳行動に及ぼす影響にも注意を払いつつも、結局のところ、認知発達主義的なアプローチに過度に偏っており、道徳推論が、道徳判断や行動の第一の要因であると考えていたし(望月, 2005)、そのような固定観念を持っていたために、道徳観や人間観におけるさまざまな疑問や誤解があったように感じる。

この一方で、著者は同じようなことが、モラロジーや最高道徳の研究や学習にも起こっているのではないかと考えるようになった。つまり、モラロジーや最高道徳を学ぶ上で障害になっているのは、単にそれらが理解や実践の上で難しいものであるためだけでなく、何か根本的な部分で大きな思い違いをしているためではないだろうか。このような思い違いは、決して一つだけではないのだろうが、個人的には、普通道徳とよばれるものに

対する“わかっている”という思い込みが大きな問題であるように感じる。

このような問題意識より、本稿では、普通道徳を理解するための一つの試みとして、「利己的本能」について取り上げてみることにしたい。周知の通り、廣池千九郎は、普通道徳が利己的本能に基いている点で、不道徳と同等であることをさまざまな文章や口述の中で繰り返し指摘している。しかし、一方で、「普通道徳は利己的本能に基づいている」ことが何を意味しているのかについては、モラロジーや最高道徳の内容を探索することと比べると、ほとんど研究されてこなかったように思われる。そこで、本稿では、道徳と利己性との関係を示している研究を概観すると共に、そこに『道徳科学の論文』を現代によみがえらせるための一つのアプローチとしての可能性も探してみたい。

2. モラロジーにおける「利己的本能」の特徴

道徳と利己性との関係を示す研究を概観する前に、「利己的本能」の特徴について、簡単にまとめておくことにする。利己的本能や利己性に関する件は、『道徳科学の論文』をはじめ、非常に多くの著述にみられるが、その主な特徴をまとめると、次のようなものが挙げられるように思う。

- ①無自覚・無意識的：全てにおいてというわけではないが、多くの場合、思考や行動の主体者は、自らの利己性や利己的本能の働きに、気がつかないようである。

しかしながら、元来、聖人正統の学問、思想及び道徳と、人間の利己的本能に基づく異端の学問、思想及び道徳との区別が、画然として存在することに気が付かなかった時代の学者にありては、自分だけは純真公平であるとのみ考えており、しこうしてその実は、知らず知らず、自分の利己的本能が、その精神の中に働いてきて、それがその学者の学説に現れてくるのでありますから……（『道徳科学の論文』①自序文, p23)

- ②先天的：他の本能と同様に先天的な性質を持つ。

利己的本能は人間の天性なれば教えずして自ら知って居るものであります。即ち飲食本能、生殖本能若くは群居本能の如きも何れもそうであります。故に人間はすべて利己主義若くは不道徳の事は教えずしても之を行うものであります。（『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』 p90)

而して此利己的本能は人間の天性にて人間固有のものであり、最高道徳は外部から人間の神経をアンダーマインせねば人間の精神の中に入って来ぬ性質のものでありますから、何人にてても自分の退化する事には傾き易く、自分の進化する事には其心

が向い難いのであります。(『新科学モラロジー及び最高道徳の重要注意』p58)

③感情的：多様で、強い感情的反応を伴う。

そこで従来の同情、親切、憐憫とか弱きを助け強きを挫く義侠心とか云うようなものを道徳として居りましたが、斯う云う道徳は皆人間の利己的本能の延長でもありまして感情的若くは利己主義的であります。……(『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』p89)

④全般的・継続的：あらゆる行動や活動の中に現れ、また絶えず作用している。

然るに、今日の政治学、法律学、経済学、倫理学などあらゆる精神科学は人間の利己心に本づく所の右の自己保存の本能の発現であります(中略)。そこで現代のあらゆる学問も政治組織も社会組織も産業組織も経済組織も教育組織も皆此人間の利己心即ち異端であるのです。(『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』p81)

すなわち人間の弱点は常に利己主義の本能に囚われておるものでありますから、たとい最高道徳を聴きても直ちに慈悲の心の起こるものでもなく、真に伝統を尊重する心の起こるものでもなく、且つ真に人心を救済したいという心も起こるものではないのであります。(『道徳科学の論文』⑧ p217)

⑤異質的：一般的に利他的と考えられている人物や行動の中にもみられるものであり、通常の利己と利他の区別とは異なるものである。

孔子の陳と蔡から迫害された時に、子貢でさえも最高道徳の実行の程度を低減して幾分か一般社会の利己的本能に迎合すべしと申したのであります。(『道徳科学の論文』①自序文, p10)

次に、宗教のごときも、ギリシア教会、ローマカソリック教のごとき、古い教派の弊害はもとより大なれど、……かの新しきプロテスタント教会のごときは、……その時代における人間の利己的本能に合することにのみ努めたので……(『道徳科学の論文』①自序, p20)

以上のような「無意識的」・「先天的」・「感情的」・「全般的」・「異質的」などの特徴があるのであれば、モラロジーでいうところの、「普通道徳は利己的本能に基づいている」という際の利己的本能は、道徳に関する諸活動の際に伴う、“相手に対する返報性”や“周囲に対する好意的な評価”などの期待感のような、主体者が自覚できるようなレベルのも

のみを指しているのではなく、より根源的で、強力なものを示しているのだろう。

この利己的本能の全体像をつかむには、まだしばらく議論と検証を進めていく必要があるが、上記のような特徴を持つことを踏まえて、参考になると思われる三つの分野の研究を以下に紹介する。

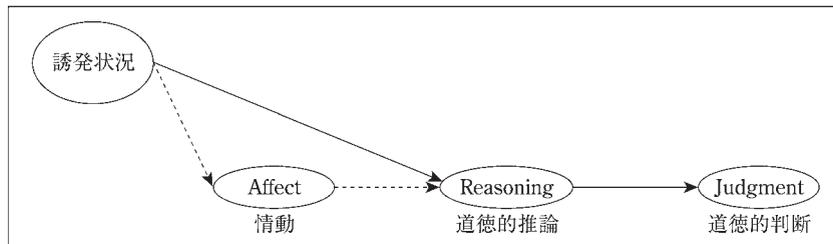
3. 道徳的直観と合理化：自己の道徳推論の影響力に対する過信

ジョナサン・ハイトを中心とした「道徳の判断は、推論の結果というよりも直観的なものによってもたらされる」という、道徳的直観の一連の研究と主張 (Haidt, 2001, 2007) は、脳の撮像技術の発展による賦活部位の研究による支持を受け (Greene, et al., 2001, Greene & Haidt, 2002)、それまでの「道徳推論が道徳判断に先行する」という認知発達主義的なアプローチを主流とした道徳心理学研究に大きな影響を及ぼした (寺田 (2009) による下図参照)。

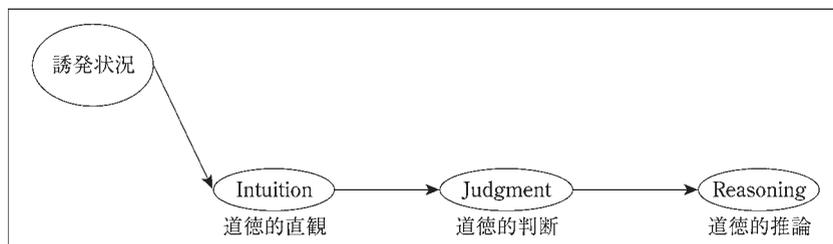
このような「人間は合理的に考えた上で、判断し、行動する」から、「人間の行動は、思いのほか、感情的であり、単純な経験則や状況的な要因によって影響を受ける」へと、前提となる人間観の見直しは、古典的な経済学理論に対する行動経済学の出現のように、道徳心理学だけでなく、より学際的な近年の研究動向のように感じられる (アリエリー, 2008, Thaler & Sunstein, 2009, など)。

さらにハイトは、「道徳判断が、直観によって導かれる」だけでなく、「道徳推論は必要に応じて、道徳判断の事後に生じる」とし、その種の推論を「真実を追究する裁判官ではなく、顧客を守る弁護士のようなもの」と称して、利己的な性質を帯びやすいことを指摘

従来の認知発達主義的なアプローチ



ハイトの道徳直観的なアプローチ



した (Haidt, 2007)。

3-1. 道徳的合理化

この「道徳問題に関する行動は推論の結果によるものなのか」という問題については、特に、個人が自身の不道徳や非人道的な行為を正当化する精神作用が存在するとして、バンデューラを中心に一連の研究が道徳的直観に先立って進められてきた (Bandura, 1999)。バンデューラによれば、個人の持つ道徳の原理と対立する行為への動機付けが高まると、そのような道徳原理から逸脱した行動をとるために、「それは道徳とは関係がない」と再認識することで、もたらされうる罪悪感を回避し、肯定的な自己イメージを維持しようとするという (moral disengagement)。ツァンは、ナチスに代表されるホロコーストのような非人道的な行為は、精神的な病理や性格上の欠点を持った特殊な人物によってもたらされるのではなく、状況的な要因と一般人にみられる心理学的な傾向の相互作用だとし、そのような不道徳で非人道的な行為を容易にする精神作用を「道徳的合理化 (moral rationalization)」と呼んだ (Tsang, 2002)。ツァンは、この道徳的合理化を「自らの行動は道徳的規範を侵していない、と自分自身を納得させるような認知的な働き」と定義し、バンデューラの他にも、権力への服従 (ミルグラム)、認知的不協和 (フェスティンガー)、傍観者効果 (ラタネとダーリー) などの研究を紹介しながら、そのプロセスを説明している。

3-2. 主体感 (sense of agency)

不道徳な行動の際には、「より地位の高い人から指示があったから従った」、「周囲の人たちがそのようにしていたので‘悪い’と思わなかった」などの合理化が生じ、主体者の考えや判断と不道徳な行動とを引き離そうとするが、道徳的な判断や行動の場合はそれとは逆の力が働くのかもしれない。つまり、「このような、正しい／優しい行動や判断は、私が考えた上で生じたものである」と認識しようとする働きもあるのではないだろうか。

哲学者であるショーン・ギャラガー (Gallagher, 2000) は、ある行為や思考に対する自己意識について、その行為や思考を、自分の意思でコントロールしているという感覚 (主体感: sense of agency) と、それらが自分の身体で行われているという感覚 (所有感: sense of ownership) とに分けている。長い間、道徳推論と判断や行動との関係は、問題が指摘されながらも、推論が第一要因であるように考えられてきた背景には、いわゆる道徳行動に対する主体感の欲求、すなわち「この道徳問題において、善悪の判断をし、それに基づいて行動したのは、私自身である」と思いたい願望の現われもあったのではないだろうか。そうであるのなら、不道徳な行為の基にある利己的な動機だけでなく、本来は直観的な働きによる道徳の判断や行動を、自己の認知的な働きによるものとして再解釈しようとする営みも、「利己的」だと考えることができるかもしれない。

3-3. 道徳的直観と感情

道徳的直観の研究は、比較的新しく、十分に体系化されておらず、様々な研究や主張が存在するといわれているものの (Sinnott-Armstrong et al., 2010)、そのような直観が、人類の進化の過程で備わった可能性 (Rozin et al., 2009, など) や、感情が大きな役割を果たす (Haidt, 2001, 2007; Sinnott-Armstrong et al., 2010) ことなどは、ある程度コンセンサスが得られているようである。シノット・アームストロングらは、自己に対する罪悪感・羞恥心、他者に対する怒りや嫌悪感などを例に挙げながら、「感情を害するものは、道徳的に悪いものである」という経験則のように、ある種の感情が道徳判断に及ぼす影響について述べている。

これらの進化的・感情的という性質は、道徳的直観と利己的本能との接点を示しているのかもしれない。モラロジー・最高道徳では、前述したように、同情・親切・義侠心などによる感情的道徳を一貫して否定しているが、その理由を解釈するヒントが、道徳的直観研究にあるように思われる。

4. 自己奉仕バイアス：無自覚な利己的偏向の自己評価

前項に述べた利己的な推論や合理化は、特定の道徳的、あるいは不道徳的な判断や行動の後でのみ生じるのではなく、もっと無自覚・無意識的で、慢性的なものであることが、近年の自己評価に関する研究より伺える。

4-1. 自己奉仕バイアス (self-serving bias)

人間には、自分自身が、他の一般の人々と比べて、寛大、協力的、公平などの好ましい特性の持ち主であり、その反面、ずるい、怠惰、無礼などの否定的な特性は当てはまらない、と評価する傾向がある。エプリーとダニングは、このような自己と他者一般との評価の違いについて一連の研究を行い、両者の違いは、「自己評価が正しくて、他者に対する評価が辛辣」なのではなく、「他者に対する評価が正しくて、自己評価が甘い」ことを明らかにした (Epley & Dunning, 2000)。例えば、大学生を対象とした実験 (n=251) では、数日後に行われる募金運動について、被験者自身に対して「募金をするつもりか」、「いくら募金をするつもりか」を尋ねると同時に、クラスメイトが「募金に参加すると思うか」、「彼らがいくら募金すると思うか」を予測させた。この結果、自身が募金しようと思っている意志や金額は、クラスメイトについての予測に比べて有意に高かったが、実際に募金した人の割合や金額は、クラスメイトについての予測させたものの方が近かった。

このような自己評価における自己美化的な認知の歪みは、自己奉仕バイアス (self-serving bias) と呼ばれており (Thaler & Sunstein, 2009, など)、バブコックとローエンスタインのレビューによれば、自分は平均以上の能力や資質を持っているという信念 (above average effect) に加えて、他者と共同して行った作業において自己の貢献度を高く見積もること、自分が加入する集団への肯定的な評価、公平性や善悪の判断におけるバイア

ス、など様々な場面で同種の精神作用が生じることが明らかにされている (Babcock & Loewenstein, 1997)。

4-2. 脱バイアスの盲点 (bias blind spot)

自己奉仕バイアスについては、その存在だけでなく、そのようなバイアスが生じる過程についても研究が進められており、自己評価の際には、自分に有利になるような情報が選択的に収集される傾向があることが指摘されている (Babcock & Loewenstein, 1997; Pronin & Kugler, 2006)。エプリーとダニングは、自分以外の人の行動を予測する際には、似たような過去の状況における他者の行動といった公然な基準によるのに対して、自分の行動を予測する際には、似たような状況での他者の行動を見た際に、「自分がどのように感じたか」といった個人的な印象や感想が影響を与えるのではないかと考察している (Epley & Dunning, 2000)。

自己奉仕バイアスは、他者との交渉事が暗礁に乗り上げる主要因となることなどから、脱バイアス化についても研究が進められているが、このようなバイアスの影響から脱することは想像以上に困難なようである。プロニンらは、人間には、自己奉仕バイアスや自分を平均以上だと思いたがる傾向があることなどについて説明した後で、再度、自分自身を評価するように求めたが、被験者はそのようなバイアスや精神作用について十分理解しても、依然として「自分は平均以上である」・「自分は客観的に自己を評価できている」という傾向が残った。プロニンらは、これをバイアス・ブラインド・スポット (bias blind spot) とよんでいる (Pronin & Kugler, 2006)。

この自己奉仕バイアスは、廣池千九郎が「利己的本能」とよんだ人間の性質を、部分的にせよよく表わしているのではないだろうか。さらに、自己奉仕バイアスとバイアス・ブラインド・スポットの関係も、モラロジーを学ぶことと、最高道徳を実践することの間に存在するギャップと重なる部分があるように感じる。

5. 本源的自己中心性：共感と客観性の限界

自己奉仕バイアスの研究より、自己に対する認識や評価には、肯定的なイメージを維持するような、無自覚で利己的な精神作用が働く一方で、他者に対する認識や評価は、相対的に冷静で客観的に行われているような印象を持ちえるが、これについても無自覚な誤解が生じているようである。発達心理学者である浜田寿美男は、人間がそれぞれ個別に身体をもっているために生じる共感や客観性の限界を「本源的自己中心性」とよんでいる (浜田, 1999, 2009)。

5-1. ピアジェの発達理論における「脱中心化」

本源的自己中心性について紹介する前に、簡単にピアジェの認知発達理論における「脱中心化」について触れておくことにしたい。ピアジェは、およそ2歳から学童期前 (約6

歳ごろ) 辺りまでの期間を前操作期 (pre-operational stage) とし、この頃の児童の認知の特徴の一つとして「自己中心性」を挙げた。これは、他者の視点や立場からものごとを考える能力の発達が不十分であることを示し、実際に、同じものを見ていても、自分とは異なる場所や角度から見ている人には、自分とは別なものが見えていること (三つ山問題) や、立場が異なることによって、同じものでも自分と他者とではその意味が異なってしまうこと (兄弟問題) などの理解が不十分であることが、多くの実験により検証されている。この自己中心性は、徐々に無くなり、次の段階である具体的操作期 (concrete operational stage) には解消され、このような幼児期の心性からの脱却は「脱中心化」とよばれている。

5-2. 本源的自己中心性

ピアジェのいう「脱中心化」は、一般的な発達過程にあり、学童期に入れば、自分と他者との視点や立場の違いを理解することができるようになり、道徳性とも深く関わる客観性や共感にも大きく影響するわけだが、人間がそれぞれ異なる身体を有し、その身体を通じて、他者や状況について考えている以上、“完全に”相手の立場に立ったり、客観的に事態を見ることは不可能である。このことを浜田は「本源的自己中心性」とよび、次のように述べている。

どんなに想像力を高めても、世の中はいま自分のこの目に見えているようにしか見えない。……

……あるいは目の前でもがき苦しんでいる人を見て、その苦しみが我がことのように如実に感じられても、それでもその苦しみをそのまま自分に引き受けることはできない。

いくら脱中心化しても、自分の身体の位置からこの世の中を生きる以外にないという自己中心性は、どこまでいっても残る。身体をもつということは、そもそもそういうことなのである。これを私は本源的自己中心性と呼ぶことにしたい。(浜田, 1999, p. 101)

さらに浜田は、この本源的自己中心性、つまり完全なる脱中心化はありえないということこそが、脱中心化の最大の教訓であるとも述べている。

現代の日常において、自己中心性は「自己中 (ジコチュー) な人」という用いられ方をするなど、利己性と混同されることが多々あるが、浜田は、自己中心性には必ずしも「己を利する」という意味はなく、あくまで、「自分が見ているように、他者も見ていると考えること」だと断った上で持論を展開している (浜田, 1999, 2009)。しかし、本源的自己中心性に関して無意識・無自覚のままに、自らの客観性や共感の能力について過信することは、その時点ですでに利己的であると廣池千九郎ならみるのかもしれない。

6. 考察：なぜ悪いことを悪いと思う心は悪いのか——「自分は正しい」という認識や感覚の再考

大正元年の大患や大正四年の困厄の時期に、廣池千九郎に生じたパラダイムシフトとそれに伴う自己反省の深まりは、今日のモラロジー及び最高道德の根幹に関わる部分であり、それをあらわす「慈悲寛大自己反省」は最も重要な格言の一つであるといっても過言ではない。しかしその一方で、その真意を理解することが非常に困難であることもまた、それを学ぶ者たちの共通認識にあるように思う。

その中でも、著者にとって、これまで特に分かりにくかったのは、次の引用にあるような、「間違っている相手を悪い」と考えることや、そのような相手に対して腹を立てることへの戒めや反省である。

予は一切懺悔致したり。且つ悪しきものを、かねてわるしと思う心遣いの甚だ不可なりしことを懺悔致し、敵を愛する心、敵を救済せんとする偉大なる慈悲心を起こして、神様に懺悔せり。（『日記』①, p284, 大正四年三月二八日）

私はこういうことを大先生から聞かしてもらいました。「人間がおこる間はまだ駄目で、まだ動物だ。どんなことがあってもおこらんようになったら、人間の仲間入りができたのだ」と、こう言われました。

おこるということはうぬぼれて、自分には罪もけがれも借財も何もない、完全な人間だと思ふから、何か気に入らんことがあるとおこるのじゃありませんか。いわゆる自己反省がないのです。（中田中『最高道德の帰着点』p75）

このような「悪いことを悪いと思う心使いが悪い」とする考え方や、それに伴うネガティブな感情の戒めと反省は、それ自体が非常に崇高な精神と教えであることや、その境地を開いた廣池千九郎の苦勞と人間性の尊さについて、学ぶ者たちに訴えるものがあるのだが、他方で、「なぜ」悪いことを悪いと思つてはならないのか、という理由については、科学的な視点を取り入れた上で、十分に議論されているわけではないように思う。

本稿で概観してきた諸研究の結果は、この問題を直接扱っているわけではないのだが、相手を悪いと考えることやそれに付随するネガティブな感情の背景にある、「自分は正しい」という感覚が、実際にはとても不安定で、覚束ないものであることを示しているといえるだろう。つまり、われわれが普段感じている、「自分で論理的に考えて、善悪の判断をした」、「自分を最良することなく公平に判断した」、「自分は状況・問題を客観的にみて判断した」などの感覚には誤解による部分が大きいことが、道德的直観や合理化、自己奉仕バイアス、本源的自己中心性、などの各研究の結果から伺える。これらの研究は、結局のところ、必ずしもモラロジー・最高道德の目指す「慈悲寛大自己反省」の真意に迫るわけではないのかもしれないが、モラロジーとそれを学ぶ者の日常との接点を明らかにする

という点では注目すべき重要な研究テーマである。

但し、その一方で、道徳的直観や合理化、自己奉仕バイアス、本源的自己中心性がもたらす感覚や認識のすべてが誤っていたり、ネガティブな結果を導くわけではないことも忘れてはならない。例えば、道徳的直観は人類の進化の過程で備わったものだと広く考えられており、実際に、難しい問題に直面した際に直観的に判断を下せることで、多大なる労力や時間を省き、迅速に行動に移すことが可能である（ギーゲレンツァー, 2010）。また、非現実的だがポジティブな自己イメージを持った人は、そうでない人と比べて、より精神的に健康であり、幸福感が高いとの報告もある（Babcock & Loewenstein, 1997）。このような性質を十分に理解した上で、それらが持つ欠点や、もたらしうる問題についても直視し、それらを改善するように努めることが、モラロジーを学ぶ、あるいは最高道徳を実践する目的の一つだと考えてもいいのではないだろうか。

7. おわりに：「普通道徳は正しい」を再考するアプローチの可能性について

冒頭でも述べたとおり、モラロジー・最高道徳を学ぶものの間では、それらが理解と実践の両方の点で、「非常に難しいものである」という共通認識がある一方で、「普通道徳が何かは既に分かっている」という誤解があり、それがモラロジーの学習上の障害になっているのかもしれない。

この場合の「普通道徳」とは、学習者が「普段の日常の中で経験している道徳」のことであり、だから学習者は「それが何かは既に分かっている・実践している」と思い込んでいるわけだが、この思い込みを正すことは、同時に、幼少時から持ち続けている、「道徳とは、正しいことや優しいことである」という、単純で強力な固定観念の見直しへとつながるのだと思う。

われわれは、道徳とは「正しいこと」「優しいこと」という強い固定観念を持つと同時に、日常で経験する多くのものごとが、「ある意味で正しい（優しい）けど、同時に、別な意味で間違っている（冷たい）」ことを知っている。道徳性の研鑽に励み、「自分は正しい（優しい）ことをしている」という信念を持ち、また周囲からも認められている人ほど、もう一つの側面の「間違い」や「冷たさ」に気がつきにくい、というパラドックスがあり、その自覚こそが、モラロジー・最高道徳を学ぶ上で、基盤となる第一の段階なのではないだろうか。

References

- アリエリー, D. (2008). (熊谷淳子訳) 『予想どおりに不合理：行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」』 早川書房
- Babcock, L., & Loewenstein, G. (1997). Explaining bargaining impasse: the role of self-serving biases. *Journal of Economic Perspective*, 11, 109-126.
- Bandura, A. (1999). Moral disengagement in the perpetration of inhumanities. *Personality and Social Psychology Review*, 3, 193-209.

- Epley, N. & Dunning, D. (2000). Feeling “holier than thou”: Are self-serving assessments produced by errors in self- or social prediction? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 861-875.
- Gallagher, S. (2000). Philosophical conceptions of the self: Implication for cognitive science. *Trends in Cognitive Sciences*, 4, 14-21.
- ギーゲレンツァー, G. (2010). (小松淳子訳) 『なぜ直観のほうが上手くいくのか? : 無意識の知性が決めている』 インターシフト社
- Greene, J. D., & Haidt, J. (2002). How (and where) does moral judgment work? *Trends in Cognitive Sciences*, 6 (12), 517-523.
- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001). An fMRI Investigation of Emotional Engagement in Moral Judgment. *Science*, 293, 2105-2108.
- ハイト, J. (2011). (藤澤隆史/玲子訳) 『しあわせ仮説: 古代の智恵と現代科学の智恵』 新曜社
- Haidt, J. (2001). The Emotional Dog and Its Rational Tail: A Social Intuitionist Approach to Moral Judgment. *Psychological Review*, 108, 814-834.
- Haidt, J. (2007). The New Synthesis in Moral Psychology. *Science*, 316, 998-1002.
- 浜田寿美男 (1999). 『「私」とは何か: ことばと身体の出会い』 講談社選書メチエ
- 浜田寿美男 (2009). 『心はなぜ不自由なのか』 PHP 新書
- 望月文明 (2005). 道徳推論と向社会的行動との関係及びその媒介要因について 『モラロジー研究』, 55, 17-41.
- Pronin, E., and Kugler, M. B. (2006). Valuing thoughts, ignoring behavior: The introspection illusion as a source of the bias blind spot. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43 (4), 565-578.
- Rozin, P., Haidt, J., and Fincher, K., (2009). From Oral to Moral. *Science*, 323, 1179-1180.
- Sinnott-Armstrong, W., Young, L., & Cushman, F. (2010). Moral Intuition. In J. M. Doris (ed), *The Moral Psychology Handbook*. Oxford: Oxford University Press, 246-272.
- 寺井朋子 (2009). Haidt の社会的直観者モデルについての一考察—モデルが道徳性研究に与える影響とこれからの道徳性研究の方向性— 『モラロジー研究』, 63, 109-124.
- Thaler, R. H. & Sunstein, C. R. (2009). *Nudge: Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness*. NY: Penguin. 遠藤真美 (訳) 『実践行動経済学: 健康、富、幸福への聡明な選択』 日経 BP
- Tsang, J. (2002). Moral rationalization and the integration of situational factors and psychological processes in immoral behavior. *Review of General Psychology*, 6 (1), 25-50.

(キーワード: 普通道徳、利己的本能、道徳的直観)